

文学の杜

仙台文学館
友の会会報

第36号

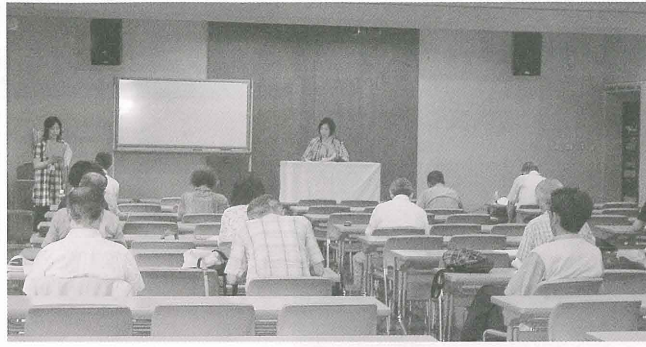
平成23年8月30日発行

仙台文学館友の会(仙台文学館内)
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話 022(271)3020

仙台文学館のホームページ

<http://www.sendai-il.jp/>



文学館友の会の23年度総会

震災乗り越えて総会

3カ月遅れて7月に開催

読書会など事業・予算案を可決

仙台文学館友の会の平成23年度総会は、会員への震災の影響や文学館の被害を考えると開催が危ぶまれたが、例年より3カ月遅れたものの開催実現の運びとなった。7月5日午後2時から仙台文学館で開かれ、22年度の事業報告と収支決算報告を承認し、23年度の事業計画と予算案が原案通り可決された。

総会は友の会事務局の伊藤美菜子担当の司会で進められた。冒頭、友の会の渡辺会長が挨拶に立ち、新会長としての1年を振り返り、今年度の抱負を述べた(内容は2面に掲載)。

審議では渡辺会長が議長を務めた。22年度の事業報告としては、7月の《塩谷・

鳥尾記念文学資料館》見学会、12月の《原阿佐緒記念館》見学会などが報告された。決算の報告については、佐野監事より適正だった旨の監査報告があった。次に議事は23年度事業計画に進んだ。

友の会発足当初より事業の柱としてきた年2回の文学施設見学会は好評を博してきたが、訪問対象も少なくなったのと変化を求める声も役員会で上がり、新たな事業として読書会、仙台市内と周辺の文学散歩を加えることになった。この新たな事業は渡辺会長の就任メッセージにあった『楽しい文学交流の場』を具現する一環とも言える。文学施設の見学会は年1回開催となったが、今年は震災を鑑み中止となった。

予算に関しては、収入が64万円(会員30名の会費など)、支出は通信費37万円と印刷費25万円などが主なものとして計上された。

役員は任期2年目で改選はないが、サポーターは新規加入2人を入れて9人となった。役員、サポーターは次の通り。(敬称略)

- ▽会長 渡辺祥子▽副会長 前原正治
- ▽阿部友康▽幹事 宇津志勇三、水月りの
- ▽監事 寺嶋信、佐野のお▽サポーター
- 伊藤正人、大久保ひろみ、尾形光子、
- 桑山圭子、坂田久子、佐藤満子、千葉滋子、
- 平野由美子、雪下康子▽事務局 伊藤美菜子

松風蘿月

振り返れば、文学作品の鑑賞は独り黙々と読書すれば事足りると思っていたようだ。ところが最近、朗読を聴くことよって文学作品を味わう方法や、読書会でワイワイやりながら味わうこともいいものだと思ふようになった。ラジオやCDで朗読を聴けば労せずして文学作品の世界に浸れる。年をとって活字を追う視力が衰えた者にはありがたい。そういった安易で消極的な動機もないではないが、もっと積極的なアプローチもあった。仙台文学館の催しで朗読に接する機会が増えるにつれ、朗読の魅力に目覚めたと言えようか。ひと口に朗読と言っても、小説やエッセーなどの散文と、詩歌などの韻文とでは、効果も味わいも異なる。以前、村上昭夫の「動物哀歌」という詩集の朗読を聴いたときは散文とはまるで違う感動を覚えた。長岡輝子さんによる宮沢賢治の作品朗読は、童話も詩もそれぞれ印象が鮮烈で、まだまだ耳に残っている。

紫式部、清少納言、藤沢周平、佐伯一麦、伊坂幸太郎などの作品を朗読で聴いた経験から言えるのは、古文、現代文、時代小説など、ジャンルによつて朗読の味わいが随分違うことだ。表現も感覚も異なるから当然だろう。読み手の持ち味も違う。今後いろいろなジャンルや作家の朗読を聴き分けてみたい。

読書会については、藤沢周平の作品を読む会に参加している。独りでは根気が続かずに読了できないでいた作品が楽しく読める。話し合っているうちに、読みが浅かったことや見過ごしていたことに気付かされる。効用は小さくない。独りの読書以上に文学鑑賞を深め、文学交流を楽しむため、朗読会も読書会ももっと盛んになってほしい。

(友)

総会の持ち方検討を

出席者の発言の場に 活発な意見を出そう

総会の後日開かれた編集会議の席で、今年の総会が話題になり、《滞りなく終わって良かった。これで今期も晴れて友の会活動ができる》ということになった。そして事務局の準備と段取りに感謝の声が上がる。そのあと、何となく物足りなかつた、という感想があり、それは総会に出席していただいた方々に関しての事だつた。

総会に出席された18名からは意見や質問が出なかつた。友の会会員の声が開ける、唯一の公の場なのだから、参加者に発言してもらおうように仕向けてもよかつたのではないか。例えば、自己紹介と最近の関心ごとを一言ずつ話して頂いてもよかつたのではないか。そうすれば友の会の事業のヒントにもなつたかもしれない、という意見だつた。そのためには会場のレイアウトなども、その観点で考える必要があるのかもしれない。来期の総会には検討の余地ありという結論になつた。

(Y)

伊集院さん 大いに語る



④から小池さん、伊集院さん、太田さん

自作や震災体験など

仙台的街と人を温かく描く

震災復興に向けたイベントの「街と文学 伊集院静『青葉と天使』を語る」(仙台市市民文化事業団、河北新報社主催)が7月20日、せんだいメディアテークで開かれた。伊集院さんが河北新報朝刊に連載中の小説『青葉と天使』は仙台を舞台にしていることか

ら、仙台の街と文学について語ってもらおうという企画。小池光仙台文学館館長と太田巖河北新報社編集局長もトークに加わった。前段には俳優の樋渡宏嗣さんによる作品の朗読もあり、

小説の一部を味わうことができた。主人公のコウタが石巻、気仙沼方面へ出掛ける場面では海岸風景がスクリーンに映し出され、樋渡さんは登場人物の声色を使い分けて作品世界を表情豊かに表現してみせた。トークでは、小池館長の質問に答えながら、伊集院さんが仙台に移住した冬の

印象や、震災時には自宅で執筆中だったことなどを披露した。太田編集局長は連載中の小説が仙台を温かく描いているので読者の励みになっていると語り、震災時も新聞発行を続けた状況を説明した。伊集院さんは新聞に載る犠牲者の報道を丹念に読んでいると話し、実際に被災地を見て歩くことの大切さを強調した。震災が何をもたらしたのか、震災にどう向き合って生きるのか、といったことを連載中の小説にも書きたいと話した。福島原発事故については、小池館長

が「人災」という見方を示し、伊集院さんは原発推進政策の責任を指摘する一方「福島の人たちだけが苦しむようではおかしい。対策本部を福島や宮城に設けて支援金をもっと早く支給すべきだ」と迅速な対応の重要性を説いた。伊集院さんの自伝的な最新作「いねむり先生」に触れながら、「身内を亡くすなどして落ち込んだときには、頑張れと言われるよりも大丈夫だよと言って見守ってもらった方が立ち直れる」と、作家の道を選んで歩んだ経緯を披露した。

文学交流で心の休養

友の会会長 渡辺 祥子



この度の東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。そのような中、こうして皆様方と集えまして、本当に嬉しく思います。本日午前中、荒浜小学校の子供達に、お話と絵本を届けて参りました。廊下にはずらりと並べられた本棚に、「少しでも子供たちの近くにおいてあげたくて」と校長先生。本が子供たちの心の癒しになっているようです。

文学には、自分から少し距離を置く機会を与えてくれたり、気づかなかった自分に気づかせてくれたり、心静めたり鼓舞したりと、様々な精神への作用があり

ます。そういう意味では、再開された文学館の存在意義も増してきているように感じます。

日本文学研究者のDonald・キーン氏が、日本国籍を取得するというニュースが震災後流れました。昨年お仕事で対談させていただいた時、学生の頃手にした「源氏物語」の中に、何気ない日常の中に美を創り出すことの出来る日本民族の素晴らしさを見出し(歌をおくり合う時)

紙を選び、墨の濃淡を使い分け、美的に折り上げ、季節の草花などを添える等の細やかな感性)、そこから日本文学の研究を志すことになったと伺いました。そ

のキーン氏が先日テレビ番組で紹介していたのが、作家・高見順の日記の言葉でした。東京大空襲直後上野駅に行った氏は、節度や冷静さを失わず我慢強く順番を待ち続ける人々を見て感嘆し、「こういう人々とともに生き、ともに死にたいと思った」と綴りました。この度の震災でも、同じような日本人の行動が世界的に賞賛されました。

どんなに時代が変わっても変わらない精神性。そんな心のふるさとが、作家たちの言葉を通して引き出される事もあるように思います。

復興への道は長いものです。まだまだ大変なこともあるかと思いますが、文学に親しむこの場所で、時折こころを休め、リフレッシュしていただけますように。友の会でも新たな交流の試みも考えております。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

(仙台文学館友の会総会での挨拶)

新企画 読書会がスタート

第1回読書会



まずは井上ひさし作品 「父と暮せば」感想を述べ合う

役員会の折、友の会の行事に会員の手による新しい行事ができないだろうか、というお話が出ました。そこで考え出されたのが「読書会」でした。

会員の皆様は、読書会っていったいなんだらう、どんなことをするのだからと思われたでしょうか。朗読を聴く会なのかと思われた方もいらっしゃるかもしれません。あるいは、「ああ、あれね」と思われた方もお在りでしょう。

読書会はその名のとおり、本を読む会です。ただし、参加者全員が同じ本を読んで集まります。そしてその本について自分の感じたことをざっくばらんに話し合うのです。

8月17日(水)の第1回参加者は9名、ほとんどの方が読書会は初めてということでした。作品は井上ひさし作「父と暮せば」(新潮文庫)です。

広島で原爆で死んだ父親が、生き残った娘の幸せを願って、時々娘の前に現れるという内容の戯曲です。つらく苦しい原爆の体験を越えて、娘が幸せをつかもうと思いはじめたまでの父と子の日々。井上さん独特のユーモアにくるまれた、秀作です。「二読ではわかりにくい」が、読み返すと深みが増す。「重い内容なのだが、読後うれしい気持ちになった」「震災と重なるものがある」「娘の応援隊長としての父親がいい」「何度も読みかえし、この作品との距離を近くしたい」「作品を読み、映画や舞台を観ることで次第にわかってくることがあるのではないか」「作者は原発事故や震災を予見していたのではないかとさえ思う」「深く重いものを、分

かりやすく書いている」「広島弁がとてもいい」「起きたことを、正しく伝えようとする姿勢がある」「父親が死んでしまった人だということが、なかなかわからなかった」「死者を想っている間は、死者も思いを残すものではないか」などなど、たくさん感想が出されました。

作家村上春樹氏が、「本の読み方というの、人の生き方と同じである。この世界にひとつとして同じ生き方はなく、ひとつとして同じ本の読み方はない」と書いていますが(『若い読者のための短編小説案内』文春文庫)、それは読後の感想を聞き合っ

てこそわかります。宇津志勇三さんの司会でなかなか中にも満ち足りた時間が流れ、2回目(10月26日)をたのしみに散会しました。作品は、永井龍男作「青梅雨」(新潮文庫)です。

(佐野)

多かつた震災作品

第14回ことばの祭典

仙台文学館主催の、第14回「ことばの祭典」短歌・俳句・川柳へのいざないが6月26日開かれた。震災の影響で一時は開催が危ぶまれたが、再開館後初のイベントとして無事開催された。応募作品数は、短歌部門78点、俳句部門95点、川柳部門84点が寄せられた。吟行会の課題は「窓」または「動く」。

賞はことばの祭典賞、選者の特選・秀逸・佳作、参加者が選ぶあじさい賞。小池光館長賞。

《ことばの祭典賞》

◇短歌の部
リュック負い雪の街(ちまた)に並び
いる買物の列静かに動く 服部 元夫

◇俳句の部
かなしいのに窓の若葉が目にあふれ
酒井美代子

◇川柳の部
百箇日過ぎてプランコ動き出す
池田 武



3部門そろっての選者講評

《小池光館長賞》

◇短歌の部
しんしんと月の光の差す窓辺いかなる
明日がわれに来るらむ 小野寺寿子

◇俳句の部
夏燕待つ獄窓の一詩人 小林 宏基

◇川柳の部
西の窓一つで生きる朴念仁 笠原恵美子

特選、秀逸、佳作、あじさい賞の受賞者は次の人たち。

◇短歌の部 ▽桜井千恵子選(特選) 初鹿野 栄 (秀逸) 佐藤点加、三浦節子 (佳作) 相澤豊子、佐藤恵子、坂本捷子、片桐俊彦、原田千代子 ▽佐藤通雅選(特選) 林静江 (秀逸) 楠本敏子、三浦節子 (佳作) 佐藤点加、村上泰子、阿部みつ、松本ミエ、坂本捷子 ▽あじさい賞 相澤深雪

◇俳句の部 ▽山西雅子選(特選) 國分郁子 (秀逸) 板澤伴百子、林静江 (佳作) 山田史子、坂内佳禰、鈴木昭五、平野一郎、関根かな ▽高野ムツオ選(特選) 佐藤一彦 (秀逸) 坂内佳禰、武田道直 (佳作) 菅野實、伯耆薫、鈴木トキコ、小野寺寿子、丸山千代子 ▽あじさい賞 坂内佳禰

◇川柳の部 ▽山河舞句選(特選) 大泉美和子 (秀逸) あきた・じゅん、國分郁子 (佳作) 佐藤点加、真田義子、相澤深雪、仁多見千絵、山田純一 ▽栗石隆子選(特選) 大久力也 (秀逸) あきた・じゅん、田中静枝 (佳作) 中島稔、笠原恵美子、関根かな、佐藤点加、國分郁子 ▽あじさい賞 星澤英子

今年も、友の会サポーターが、裏方スタッフとして、ことばの祭典に参加しました。受付での短冊配布、あじさい賞用の作品貼り出し、みなさまから投票いただいた用紙を回収しての開票作業など、一日中、文学館職員とともに、イベントの裏側を支えました。

文学館の七夕飾りに

会員が折り、サポーター飾り作り

震災復興を祈り千羽鶴



文学館の七夕飾りに付けられた千羽鶴

ある友の会会員より、「千羽鶴を折っているのですが、文学館で毎年飾っている七夕飾りに何かお役に立てたらありがたいのですが」というお申し出がありました。会員からのこのようなお声は嬉しいことで

す。友の会として文学館の七夕飾りに関わらなければいけないかということになり、7月某日、都合のつくサポーターが、急遽集まり、その折鶴を一羽ずつ丁寧に糸でつないで、吹き流しの飾り



サポーターが集まって飾り作り作業

扇畑忠雄の歌碑建立

東北アララギ会「群山」発行所

仙台文学館構内の散策路に仙台の学者歌人として知られた扇畑忠雄の歌碑「雪の原青々と翳る時のありいづくともなき北のふるさと」が建立され写真、4月に除幕式が行われた。

建立したのは東北アララギ会「群山」発行所(徳山高明代表)。扇畑は東北大学などで教える傍ら、万葉集の研究を深めた。一方では東北アララギ会を創設し歌誌「群山」を創刊、長年仙台で活躍し、平成17年に死去した。1911年の生まれで、今年が生誕百周年に当たる。碑はそれを記念して建てられた。使われた石は福島県三春町産の青鍋石。

作りをしました。

寄せられたその鶴は、震災復興への思いをこめて一羽ずつ丁寧に折られたもので、さまざまな人の協力で集められた包装紙を利用し、素朴な中にも彩のあるものです。出来上がった千羽鶴の飾りは、7月15日、文学館の七夕の中に一緒に飾りつけをさせていただきました。

震災からの復興へ祈りを込めて、8月9日まで、文学館2階に飾られました。

菊田さんが震災追悼詩集

友の会会員の菊田郁郎さんが東日本大震災をテーマにした「3・11 鎮魂・追悼詩集 沈黙の海」を手作りで刊行した。ワープロで印字した32編の詩を収め百部製本した。

気仙沼や石巻など沿岸部で教職経験のある菊田さんは「被災された知人友人教え子達への鎮魂と追悼として、収束の見えない原発への警鐘を込めてこの詩集を作りました」と「あとがき」に書いてい



先生のプロフィールが刻まれている。

散策路には音楽家・海鉾義美の楽譜入り石碑や英国の学者詩人エドモンド・ブランダンの詩碑もあり、文学的雰囲気を一層楽しめるようになった。

る。「陽炎」という詩には「公園に 子供の声は聞こえない／ブランコも シーソーも／もう動くことはない／真夏の公園に／子供たちの声と影だけが／陽炎の中に揺れている」と喪失感を記す。価格は送料込みで600円。うち300円は震災孤児の基金に寄付。連絡先は携帯電話090-4632-7657。

◆会員情報コーナー◆

- ▽会員の境教樹さんが代表を務めるみやぎ聞き書き村は「みやぎ聞き書き村草子特別号 歳月よ、遙かなれども」元特攻隊員の回想」を出版しました。
- ▽会員の井上康さんは「亜礼母禮通信 第一号」を発行しました。

あとがき

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第36号をお届けします。

▽これまでは会報編集担当役員1名と事務局で作成してきましたが、今号からさらに2名の役員が加わり会報編集を行うことになりました。さまざまな発想を持ち寄って創り上げ、より豊かな紙面になっていきますように。(美)

▽読むだけだった会報を、編集する側に立って見てみると、4ページの紙数をどんな内容にするか、誰に書いていただくか、字数はどれくらいか、写真をどうするかなどいろいろあるのだとわかる。会員の原稿が集まる会報にしたいと思えますので、ぜひご協力ください。(佐)

▽ゆっくりは遠くまでと相通じるそうです。一人一人がゆっくり行く気持ちをもちたいものだ、などと考える今日この頃です。(Y)

▽同じ事象を伝えるにも、客観的な報告と主観的な感想文とは大きな違いがある。前者は正確だが堅苦しく、後者は個性の味付けが加わって軟らかい。今後とも会報の作り方への模索が続く。(友)